02

短歌作品

〔五首〕

幼年期は終わらない　植木諏訪　24
やわらかな陽射し　ぐら　25
プロローグ　佐々木朔　26
12月26日水曜日　朝　中山美優　27
長靴の音　松本翠　28
緩やかに衰えてゆく動物園で　綾門優季　29
怠惰／シスターフッド　家永楓　30
人に成るまえ　小野田美咲　31
無傷　狩野悠佳子　32
恋と差延　坂梨誠治　33
応用芸術　佐久間慧　34
海の近く　渋谷美穂　35

〔十二首〕

あそびパワー　安蒜さつき　36
冬への扉　植木諏訪　37
たかしくん　ぐら　38
摸倣子　佐々木朔　39
鎌倉晩冬　高田崇一朗　40
上旬　種田郁子　41
ある種の戦いの歌　堂那灼風　42
入射角39°　中川聡　43
言の葉の指す物　松本翠　44
隷属のチョコレート　三田史也　45
からっぽは死ね。　綾門優季　46
兄は一人っ子　大村椅子　47
恋をしなくとも育つ　小野田美咲　48
translucency　佐伯紺　49
たくさんの他人　中村みなみ　50
フィクション　森屋和　51
慌ただしい国　山崎有理　52
回転運動　和久井幸一　53
空に大穴　沖野樹里　54
汽水類　新上達也　55
あいつよ　久石ソナ　57
氷なし　山階基　58
野に放つ　渋谷美穂　59
そうだ　短歌食べよう　西山ぜんまい　60
裏路地　藤井朱里　61
ひかり2013　安田直彦　62
ロード・ムービー　山中千瀬　63
グランド・フィナーレ　山中千瀬　64
クレジット　山中千瀬　65
黄昏のレタルギア　吉田隼人　66

〔三十首〕

選ばれて春　佐伯紺　68
世界の終わりが遅刻してくる　森屋和　72
くじらの前歯　狩野悠佳子　76
メインストリート・ストリーム　山階基　80
青の挨拶　井上法子　84
女体家族　藤本未奈子　88
びいだまのなかの世界　吉田隼人　92
わたしと鈴木たちのほとり　吉田恭大　96

あそびパワー

安蒜（あんびる）さつき

ゆびわという首輪は小さくつつましく野良（ノラ）ははじめて大志を抱く
牧歌的なにんげんなんだと云うならばわれは生きるよ軍歌みたいに
あそこまで昂ぶりてやめると決めたらば昂ぶりてやむ心臓をさせ
にっぽんは初恋のコに似てるからなんかあったら助けてあげる。
石もてばおまえに当てたい音させて　石をさがしておまえさがして
おまえったら笑え　ペパミントグリーンみたいな奴になって笑え
山手線寝過ごしたっていったってきみはまあるい環（わ）の中にいる
満天の星空のつよさ翳（かげ）らせて勝ったつもりの池袋がすき
ひんまげた僕りぼっちの行き方に他人（ひと）が容易（たやす）く引いた傍線
ぜつぼうがらっかんに変わるしょっぱさを僕はちょっぴり憶（おぼ）えていたい
バクダンでも落ちるのだろかこんなにもあなた私のあたま抱えて
何度でも、何度でもぐるぐるまわるから一つ一つに釘を打つんだ
いっしょうけんめいさよならするんだ

冬への扉

植木諏訪

冬物に埋もれた君のイヤリング　季節の狭間に沈んでいった
冷めきったコーヒーカップの暗闇に笑顔の君が誰かの笑顔と
吐く息が夜明けのような靄となり思い出みたいな気分になった
玄関の手触りがまだ残ってて冷たい感じがたまらなく嫌で
ボートから何度も何度も鋭角を投げ込むたびにボートは進む
重力はどんな枝にも平等に　有り余る実は落ちて砕ける
湖畔では鳥が群がる　僕たちが忘れたものを啄んでいた
水面に波紋をふたつ燻(くゆ)らせて芸術的と言う　進まない
窓を閉め時計を止めて胸の奥深くを覗くと砂漠のようだ
かつて見た君と僕との光景は遠くに浮かぶ夕日で逆光
廻り続けるもののため象は鳴き消えてゆくもののため夢を見る
しんしんと向かいのビルに降り積もる　時がたったと気づいてしまう

たかしくん

ぐら

ランドセルを拾いに行った千瀬ヶ沼たしかあの日は空が緑で
早朝の廊下にわたる足音が数えられないほど増えるまで
制服が羽ばたくときに舞う粉をわからないまま肺腑の奥へ
問一に頭ねじれて窓のそと低学年が鬼ごっこなう
ポケットに隠しておいたレゴ人形　ティッシュにくるんで焼いてしまおう
水槽の底で生まれる泡（あぶく）には生きた臭いが染み込んでいる
刻々と赤くなってく教室で居残る影が赤くなってく
死にたいと放った声が拾われてオシロスコープに姿現す
ゆくりなく今日からあちら側がきみ　底辺かける高さを割って
誰かみんなに言っといて放課後ジェット機が飛ぶ見に行けよって
たかしくんは倍の速さで追いかける夏の終わりに絵日記描いて
煤けたガラス板から見透せばあれが光を欠いた太陽

摸倣子

佐々木朔

遺伝子に似たるきざはし上りきて銀河に臨む　われは地球（テラ）の子
かつて人は球であったとプラトーン　別たれたのも進化だろうか
火星にも革命の影　防人のコモドオオトカゲ酸素吐き出す
ライフイズビューティフルだと習いし日おちてきた少女と旅に出る
ひさかたのメガソーラーが競い咲く未来を夢に見る副課長
ラメ入りの飛行機を折るいもうとが立派な芥子の花へと育つ
ボイジャーが何をしたのだ　棄てらるるために産まれしおまえが愛（かな）し
You did not release the ball 教えてよそんなにも星を愛せるわけを
親は子を置いて逝（ゆ）くもの　子は親の屍（かばね）を置いて歩みゆくもの
重力の魅惑（チャーム）ひそやか　おとされし飛行機を抱く地球（ははおや）の恋
進歩とはすなわち別れ　街灯に隠されてゆけわれらが知己よ
星はやがて日に呑まるると教えられおびえし子らへ贈れロケット

鎌倉晩冬

高田崇一朗

段葛たどりしさきの冬紅葉そのただなかに大社あり
流鏑馬のごとき速さで飛び上がる鳩いにしへの空に消えゆく
黒漆の鏑矢古ぶ今昔の狭間を飾られしまま飛ぶため
冬木を稲妻のごと駆けぬけし栗鼠我が頭上弄びけり
連ねたる雁御仏のうへ越えて寒風はこぶ高徳院かな
銭洗う水が揺らぎは宇賀神を象りてその清さをたもてり
石段を歩む和尚や中世の蝸牛と等しき速さとおもふ
文豪らが好みし寺は七百年北鎌倉に屹立する禅
闇黒の土牢に幽閉されし皇子虫漂ひて無念に触れをり
かまくらや老舗のシチュー食するとき胸に去来す専修念仏
歩幅狭き女学生らが三つ編みを揺らして歩む道に唐梅
都会へと我を連れ去る風纏ふ鉄道鎌倉駅に至れり

上旬

種田郁子

春は来るくるくる回る透けて光りつつ　きみの吹くひといきだけで

神様は見ていないんだ　国道のゆるいカーブで追い風になる

上空にかかる霞のしあわせは遠いものほど大きく見せる

日中は暖かく夜は冷え込みます　上着を借りてみるとよいでしょう

くちびるを舐めてしまってのみこんだ赤いろいつしかまなざしになる

急行に乗って「すき」からはじめると「なんでもない」で着く渋谷駅

幾すじの光ほどけてからまって夜のシャッターだけが見ている

新月と羊の出てくるあの歌を歌って泣いてすこし眠るよ

かんたんに考えていい　溶かしたらカフェオレになるからそこにいて

負けるのがたのしいことは多々あって漂っている甘いもくれん

少しだけ上ずっているブラジリアン・ライムわたしをくすぐらないで

偶数がきらいと言って笑われる　吹きつけている光はおどる

ある種の戦いの歌

堂那灼風

闘争の日々を素肌で渡りゆくこのアオムシも勇者の血筋
ねずみより脆い命で脈々と地上の覇者に挑む戦士よ
幾年の縛め脱いでその翅が地上にみせる夏のはじまり
弾かぞえ翅を広げてとびかかれすべてを懸けて青い戦場
遺伝子に鎧兜を承け継いで一たび着れば死んでも脱がず
ぶつけ合う徒手空拳の総身が削る命で火花を放つ
埋み火の修羅場をくぐる猛者どもを旗も掲げず踏みしだくもの
遺伝する敵意は永劫変わらずにおまえを黒と断じて叩く
夏の日に殺したおまえも冬を知る　砕けた骸を日陰にのこし
自走する機械仕掛けのつわものよぜんまいを巻く神はその血か
ナナホシは走る私にぶつかった　逃げずわめかず翅をやすめた
一度死ぬことがさだめというのなら一度生きることを選ぼう

入射角39°

中川聡

足元をぐらつかせているピンヒール邪魔そうだから蹴り飛ばそうか
温もりは知っているけど抱き方を知らない腕は埴輪のように
タンスより舞いしホコリはふわふわと母の昔を懐かしみ笑う
梅の実を焼酎に漬けもう五年酸いも甘いも知ったは同じ
「中点を結ぶと使える定理だよ」オリオン座なぞるその要領で
満員の電車の中に浮かんでる空気求めて上向く金魚
君と会う頬が真っ赤に染まってる西陽の角度は39°
心臓にアイスピックを突き立てるひんやりしてるああ生きている
黒縁のメガネのレンズ曇ってるいつもと違う自分になれる
浴槽に立ち込める湯気食いちぎる仙人はなぜ生きられるのか
特別な能力者だと信じてる左利きなどたくさんいるのに
ラジオから聞こえる声に話しかけ会話が成立するか試そう

言の葉の指す物

松本翠

黄表紙をエレナはすらりと読み下す　軽くアイデンティティクライシス
小3は本居宣長旧宅をほんいせんちょうきゅうたくと読み
積もりゆくチリとホコリと饐えてゆく臭いとがあり生きている部屋
明日よりは片付けをせむ　明日よりは料理と掃除と片付けをせむ
濁りゆく魂を思う熱湯にもやしを茹でる十五秒間
また今度飯でも食おうと言う君の瞳は黒く嘘を吐いてる
崩折れる体を支えてくれないかたった二本の腕でいいから
凍えつつ死が過ぎ去るのを待っていた朽ちかけた夜の冷たいベンチ
トラウマの膾炙によりて薄まりしシニフィエのことを何と呼ぼうか
横暴な名前の「おいしい牛乳」はおいしくないを許さずにあり
床に就き空を見ており寒の入り明日は淋しき日となりそうで
散り散りになった私を綴じるのは玄関先で聞いたおかえり

隷属のチョコレート

三田史也

「この間ディズニーシーに行ってきてクランチチョコを買ってきたんだ」
地下鉄の通路を下りてもまだ地球（ここは海抜5.2メートル）
昼間から何も食わずにつれづれとモスコミュールやジンジャーエール
一度でもバレンタインを吹き飛ばすぐらい誰かを愛してみたい
ひとつめは好きな女の子に捧ぐ果物入りのホワイトチョコです
道端に落とされているキャスケット　とっくのとうに秋は終わった
ホワイトデー　対義語としてバレンタインデー（ブラックアンドホワイト）
カカオマス（人類に練られることも食われることも隷属のこと）
ふたつめは女子高生が足許に落としたビターチョコレートです
（品質の保持をするため窒素ガス充填しています）（開封）（無臭）
シュシュの輪にヘアアイロンを通してる（とても汚いことしてる気分）
（糖分を悪者にしてガナッシュを愛する人に塗ろうとしてる）

からっぽは死ね。

綾門優季

思い出は衰退したね一斉に桜並木が倒れるように
決意してひらいた家族アルバムに異常な量の押し花と婆
つぼみのままの夢や悪夢を呑みこめばひたすら孵化に近づくねむり
なきわめきながらダーツで心臓をあてずっぽうに突き刺すような
要するに雪だるま戦争でしょう雪合戦の行き着く先は
あまりにもどぎつい色のジャムのせいで朝のニュースをわすれてしまう
炭酸水のみちてくる図書館で泡の集まりやすい絵本を
あちこちでわれるびいだま　かくれんぼしていたこどもたちのあしもとで
スクランブル交差点のどまんなかでしゃがむと止まる体内時計
あ、見覚えのある断崖絶壁だ、初夢の末尾を飾ってた、
人生の岐路がこんがらがっていて、あしたはきっとほとんど樹海。
補給する日々に飽き飽きしてきたね。からっぽは死ね。素直な瀕死。

兄は一人っ子

大村椅子

「寝ちゃダメだ……寝たら死ぬぞ」と言い聞かせ眠りに落ちて死んでいきたい
友達になってくれなきゃ泣きながらみんなの前で土下座するから
人類で二人だけ生き残ったら……　君と初めてガンダムに乗る
悲しみはいくつも名前をもっていていまはどれにもあてはまらない
大丈夫　三千世界のどこかには君が死んでる世界もあるさ
「君たちは子供をつくっちゃダメなんだ！」もしも時間をさかのぼれたら
幸せになりたいんだね　死んだっていいけど一人では死なないで
「オールバック」は名前がエロい　どうしてそんな髪型なんだ
愛がなきゃ人生なんてむなしいと　みんなホントにそう思うのか
妹よ、彼氏とうまくやってくれ　私は甥より姪が嬉しい
悪くても死ぬだけだって思ったらそんなに悪くないと思った
来世では母になりたい　そうやって君と世界の間に立とう

恋をしなくとも育つ

小野田美咲

帰りたく戻りたくなる日があって、その日があるからなんて思う
きみだけは鼓膜をゆすって起こして　外は光が降り注いでる
なつもふゆもあきもはるもいつも二文字　あなたを起こすのはむずかしい
お天気のはなしばかりをしているね　いつだって朝ごはんなんだよ
今きみと数ミリ、ひとかけらを奪い合えばそれが幸せな日々
手を重ねるとかあぶない事をして明日は大切な日とはなす
今日は明日やってこない薬局の袋ぶらさげて　もういたくない
未来の話ばかりしたから明日は過去の話をときみはわらう
二度と会えないみたいにはなそうよ　今日は帰り道も忘れたい
明けない夜が来ればいい明日にはだれかに出会ってしまう気がする
日曜日　母と口をきかなくなって初めてカーテンを洗う
ぬくもりをまるめたものを毛玉という春まで待たずブラシをかける

translucency

佐伯紺

悪い夢をみませんように　発車まで1分少々お待ちください
帰る場所も行くあてもなく手の中の金平糖が切符の代わり
どこからが夢であるのか目の前のとじた瞼のまつげが伸びる
夜に光はたくさんあって動いたり意味があったりなかったりする
夢を泳ぐときの呼吸器官としてひらいたりとじたりする拳
ベルマークの鈴の音を知る停車駅　視界の端で踊る紙きれ
目をつないで手をつむったらお互いの夢に訪ねあいっこできる
どうしても神様を困らせたくて銀のエンゼル4つ捧げた
降らせたいものを降らせていいんだよみんなひかりを通すのだから
完璧な光景をみたいままでに触れたすべてのものが世界で
どこまでが夢だったのか手のひらにまるい金平糖がひとつぶ
やわらかい日々を敷きます　着きましたら降りたホームでお待ちください

たくさんの他人

中村みなみ

ひとりぶん開いたシートそれぞれにそれぞれのイマジナリーフレンド
私ではなくてもよかった／でもよかった　掴んでは離される吊革
手をかざしぐーぱーをするみどりごはつかめぬ朝日を不可思議に見る
波に乗れぬサーファーが浜に帰りしを見届けてのち電車が動く
日が海に溶けてゆくのを眺めてた　世界を形容したい気分だ
自己啓発の本を開いている人が三人並ぶ　ビンゴ、と思う
何が悪いってわけじゃないけど　たたん、たん　電車は揺れるし人は傷つく
傘を開きたくなる　熱帯魚のような色　誰かの呼気の降り注ぐ箱
旅がしたいね、津々浦々のコンビニでケーキを探して回るのふたり
トンネルで、それは長いトンネルで、それを抜ければ、彼の町です
（どこか遠くへ行くんだろう）大きトランクを曳きつつホームに翳りゆくひと
いきもののあたたかさであるバゲットを抱えなおして、もうすぐ着くよ

フィクション

森屋和

わたしよりきれいな登場人物が世界に手を捩じ込んで捻った
開くはずの窓のすべてが落ちていて人魚のひれをやさしく千切る
種を運ぶ風がなくても揺れている海草たちが呼吸する庭
頭まで浸かる真水は真昼ほど冷たくはない　すくってあげる
幼子の手も取ったろう　飛んでいく私の手を取る時より柔く
綻びが見えないように水を飲む喉が震えて何か聞こえた
あなたになる前のあなたを知っている　名前を知らないまま愛せます
白い手で窓を開けば何度でも終わってしまう水浸しの家
産声をあげた姉さんそれは海ではなくあなたの体の一部
触れるものすべてに寿命があることを知ってあなたは売られていった
飛ぶことを知らない人も羽を持つらしい　それでも飛べないらしい
忘れてもいいよ人魚であったこと　特別だって信じてたこと

慌ただしい国

山崎有理

朝起きて鏡を見ても寝る前は鏡を見てない慌ただしい国
生きてきてはじめて使ったろうそくがかなしみのまねしてから乾く
なくしものが見つめられる　ずっと　こんな　ふるい　タイム　マシン
未完成ビルディングから脚のない机を放る父の夕暮れ
電柱の何でも屋さんの張り紙のしたにかなしい猫の報告
みそしるの漆のうつわの桐の葉にひみつ金庫が覆われてしまう
古着屋が入っていたテナント　夢のなかは割れ窓のなかそれにそのそと
国道と海に面した駅からつづくパンをくわえた鼓笛隊
電車から　電車へと　友を追ってゆく中学生の足音の響き
ふくらんだボタンを連打して反応がそのとおりに繰り返されている
セックスで解決できるケンカにておれの純粋な日本語たち
南には太陽があって東、西にも太陽があって、北からはすべてが見える

回転運動

和久井幸一

腕時計海のかなたへ売り渡しまたあたらしく回転運動
赤色の殻を片手で割るように飛行機雲が広がりゆくので
とうとうと語るひとびと　黒鍵を叩いて叩いて空は白
いつまでも二人は善と悪でありオリーブ畑に家一軒
分かち合う時刻表だけひとりひとり劇場から出る傘を開く
まっすぐなさみしさ　終わりまで回転せずに進む歳月
ふつふつと念仏アーメンリフレイン　黙々と雲黙々と雲
露台（バルコン）の奥の時計の午後五時の鐘が我らへ　返された生
かけめぐる音の軽さを　街中にアルファベットの落書きあふれ
郷愁の彩度があがる朝夕は水面の街が焼けあがる　赤
ありふれた百八十度の回転を頁に頁に頁に頁に
焼きたてのパンを飲み込む　心臓へかえりゆく血をかえりゆく血を

空に大穴

沖野樹里

カーテンを開ければ原野　夜じゅうのあれは最初に光った蛍
バブ　僕のバスタイムにも祝福を　バブ　ジャスミンの花冠は泡
地下鉄をめぐる僕らの明日からは　東京は晴れ、目黒だけ雨
東京の原始時代に吹いていた風がようやく二停先まで
信号が変われば聖母になる人の左手に初雪の訪れ
新しい眼鏡があなたに似合う日の新宿をペンギンが行き交う
栄光の横断歩道は白と白　向こう岸には朝が生まれる
本当の灯りはなくてローソンの周りの雪だけやけに眩しい
この骨はカンブリアの骨　定食の皿にながなが学名を書く
エレベーターのドア突き破り天高き青の青までかもめ、さあゆけ
街中の坂に光暈　自転車で君と迎えに行く春だろう
祝福がまだ足りない、と少年は花野を駆ける　空に大穴

汽水類

新上達也

扉から光が洩れてしまうので洩れなくていいのだと伝える
開栓のときに力を入れすぎて瓶に入ってしまう彗星
ねむい日に電話に触れているときに涼しいのは窓を閉めなよ
加湿器は家から出ない／でたらめなサイズの雨が降るね／ようこそ
「屋根裏」に似ている言葉：「電球の溶け方」「燃える牛」「白い」「海」
思いつくたび書いたためちくわぶのことしか書かれていないメモ帳
はるさめはあらかた茹でてゆく気だし鍋からも応援されている
炊きたてのおいしい海がなんでまた原生生物類を生んだの
買いたてのノートを持ってきてしまいもう二度と書けないほど洗われる
停止信号ごとに電車がブレーキをかけたためものすごい夕立
待つたびに快速が来る　そのどれを選んでもかならず海に着く
おれだって飴はおいしい　砂浜を出るときにひとつずつ埋め込め

※本作は同人誌「はならび3号」掲載作を元に加筆修正したものです。

あいつよ

久石ソナ

重力に恋はしないさ美しいあいつを乗せて飛行機は行く

部屋を見るキャリーバッグのひとつ分ほどの荷物と推理してみる

ワイパーの動きに見入る（虫みたい）なかゆびひとつにあいつ思えば

店員にぎょうざ頼めば片言に日本語が飛び交う王将

長いほどおいしいらしいフランスパンは買い物かごにはみ出すほどの

ほんとうに行方知れずなあいつだなそろそろレーシックを受けようか

あいつなら見てないけれどシャンパンの飲み終えた瓶ならそこにある

今日は少し朝が早いな　テレビでは知らない町に初雪が降る

雨に濡れたあいつのパンティ絞りつつフランスパンをこがす朝食

サボテンに水を与えるいつまでもあいつの化粧水は減らない

失踪の多いあいつのかたわらの北半球はあいつの味方

あいつよ聞きな引力はあらゆることを解決しない　さらばだ

※「NHK短歌」二〇一二年八月号「ジ・セ・ダ・イ・タ・ン・カ」の掲載作を加筆・修正したものです。

氷なし

山階基

氷なしの注文をすつぽかされてぼりぼり食べる深夜のマック
あをあらし尽きぬ話はあるけれど君の枝葉に抱かれてゐる
濡れるのは壜の中身が染み出してくるんだよつて君は笑つた
社会へ出るのでなく入るワイシャツを飛び出したがつてゐるやうな肩
ビル風が散らしてしまふからこれで総てなんだろ屈んで拾ふ
夕闇の自転車置き場まつすぐに停めた自転車に辿り着く
キャンパスで抜かれた人を抜きかへすときに少しのためらひがある
半日を出しつぱなしの水差しの水をシンクにぶちまける朝
君が手づから押し開けてそのままで許すとしか言へなくなつてゐた
記念すべきセックスは果てラーメンが食べたくなりぬ服を着て行く
ネクタイを結ぶ　あなたのくびすぢの堅固な梱包になりなさい
夏明けてさつぱりとした横顔にはたりはたりと月光の差す

野に放つ

渋谷美穂

私が今放たれてゆくこの朝もあらゆるドアが開かれており
位置どおり律儀に止まりドア開けぬ回送電車に私は映る
油っこいラーメンを食べたいんだと君に言われて秋は深まる
あたしって、本当にばかだったんだ　夜をこんなに明かしてしまって
寝返っては、スマートフォンの受信からダイレクトメールを消す午前4時
ハーケンを山肌に刺すようにしてマークシートの記号を刻む
エアコンがドの音みっつ奏でれば部屋に生まれる南国南極
一日中が夜という地下鉄に揺れれば見える星座の灯り
太陽に乗ってるんだと蝉が鳴く灯りをひとつ消しては夜に
地下鉄に乗れば見られる夢もある　ここが何処かの水脈ならば
ビルの間に東京タワーを覗き見る浜松町はかつての浜辺
午前二時は明日のためにあるんだと聞かせつ閉じるまぶたの奥で

そうだ　短歌食べよう

西山ぜんまい

札幌の週間天気にならんでる雪だるまひとつ箸で食べたい

イヤホンをたべたらコードも食べなければならないけれどコードは不味い

かわせみのわたせるはしにたらたらとレ点がついててやだなあと思ふ

かたつむりんリングでインド Internet! 鳥取砂丘でらっきょうづくり

熊笹の青き静寂（しじま）に突撃し顔から沈んでいろいろ怪我した

「１００万円欲しい」と言って吐血したぼくの母さんきみの母さん

諸行無常だねっと愛花（マナカ）が微笑んで今日も今日とて僕は死にゆく

うずしおのあわあわランド徳島は陸らしいこと陸らしいこと

駅前で泡沫候補がくちを空け土下座している僕もしている

もう21世紀なのに僕（とか）はミック・ジャガーの顔とか知らない（ジョン・レノンは知ってる）

短歌は宇宙人がつくったたかたー

ＢＳで短歌はうちうにかへれって声明を聞き府中へ帰る。

俵 万智　三回読んで納得しサラダが好きな番長になる

裏路地

藤井朱里

路地裏にバケツぶちまけゐる朝にすべての朝露はわれに遠し
古くなつた幕ノ内弁当みたいだね更新しても壊れさうな朝
指先から消えてしまひさう怒りとはこんなにも胸に重たきものか
生温き雨が交じつて水温は上がりけり夏の観覧車うつし
もう夜(よる)も明けるのだらう少しだけ温度の下がるおとうとの部屋
先生の窓辺のやうに陽は満ちて白木蓮の花は咲きけり
水いりのバケツを持つた子どもらが夏を待てずにするへび花火
プロミスの看板は燃え遠景に小さく崩れゆく観覧車
蛹では蝶がいつたん溶けることも知つて解剖ねだる子らなのか
あの頃の刹那的だつた母さんと昇降口で待ち合はせする
お前はそこで見てゐてよつてコンクリの上に滲(し)み出すビーサンの水
水を撒き陽が透(とお)るやうに育ててもこれらもいづれ燃えてゆくもの

ひかり２０１３

安田直彦

遅い朝　遅めのジェットコースター　かもめのように快速が抜く
トンネルを抜けたみたいにあかるくてプレイリストはゼロ年代へ
日曜はパレードはきみも見てごらん花降る街なか満開のドア
写生にはうってつけの空　六階から落ちる子どもの最後に見る空
幾度もの夜を越えたと記述され描写はなくて正午が終わる
セックスはあおむけのまま動けずにかみさまの肌は大きなシーツ
ほんとうは夜がこわいんでしょって地下鉄の動き出すとき揺れが、告げる
here と there 足りない t の立ち並ぶ ttttttt 国営墓地
水差しの用意を忘れそのことを思い出さない日々が始まる
あかるみに籠をひらいて　籠をひらく瞬間までの日々をはなって
花びらは最後にひらく場所だから喝采も最後まで残るよね
早起きの朝の光が続く国　私は始発をずっと見送る

ロード・ムービー

山中千瀬

かつて犬だったと思う。部屋中にひかるほこりのつぶを見つめて
死後ひとりの死者になるしかないことをどうにもできず飲むウーロン茶
サーカスは黙って行ってしまった。置いていかれた町で暮らした
雨降りに近景ばかり冴え渡りずっともどらない猫がいるんだ
透明なこどものからだほろほろと散らばっていたサーカス跡地
光として降るしかない雨たちを連れ映画は何度も父母を産む
空想のなかに何度も水没の故郷を　きれい。きれい。と言った
（行くあいだあかりを消してはならない　かわいた湖底の端から端へ）
致死量についてときどき考える公園の鳩のことのほかにも
フル・カラーの人類と犬そして雨（映画史上に降る光たち）
公園で拾った鍵をいっしょうの宝のように財布にしまう
いちど遠くへゆかねばならんよく冷えた水道水で顔を洗った

グランド・フィナーレ

山中千瀬

空転を重ねる観覧車を仰ぐ　つがいのための倫理持たずに
鐘がすごくどこかで鳴っている鳩がいっせいに飛ぶ気球に乗って
神様。それは知らんひとの名前呼びながら呼びながら光る窓
おっぱいのすべてはただの美となってやわらかく人類が滅びる
そして、雨が降ってきたよ。鳥類の声がスピーカーからきこえるよ。
水たまりがいくつも並びそのなかに魚影となって充ちる死者たち
ましてここは世界の終わりいりひなす緑虫（ユーグレナ）たちが水面（みなも）に眠り
工場の町中（まちじゅう）で臭う町に住みさかなイコンをえがいてました
きみを指して春と呼びきみが春となり春の眠たい電車で眠る
それはなお続くはるさめ　銀河まで寄ろうそのあと嘘をゆるそう
鳥籠をかかげ（鳥たちが僕らの灯だったのだ）草原を行く
いつか死ぬ小鳥のことを忘れても世界史を覚えてる世界史を

クレジット

山中千瀬

熱帯のさかな哀しい詩歌かな　行かなくちゃあたしたちの暮らしに

話して　二度と帰れないって知って気球に乗ったひとたちのこと

あたしから延びる身体で永遠の可視の部分のあなたに触れる

先生が森さんを海（モーリエ）さんとよぶ舌から冬の湿気のにおい

「涼子、雨が降ってきたよ」隣席の涼子が母から受け取るメール

うそでいいから虫たちに雪をあげよう溶けるからだを持ってうまれた

呼気でにごる窓に少女がつっと絵をかいてそこから見えるのが海

あまつぶが町をあざやかにしていく（見てなよ）生まれたいのだね町

光る水面（みなも）みずの一匹一匹に発音できない名前をかかえ

詩のことばではなすのをやめ老いていくパパ、ママ、やっと南においで

あれは姉妹だろうかおそろいの光　まもなく両側の窓がひらく

ああ通過していく電車あれはみんなあなたを見送りに来たひとたち

※本作は、現代短歌新聞第8号掲載作「生活を送る」に加筆修正を加えたものです。

黄昏のレタルギア

吉田隼人

Je veux dormir! plutôt dormir que vivre!
—— Charles Baudelaire,《Le Léthé》dans *Les Pièces condamnées*

叱られぬ程度に髪を染めたる女子の校則のとほりの白靴下、冬は来ぬ
まだあをき東の空に月こほりゐてかなしみの原理をわれは知りそめにけり
さびしいといふ一言にたどりつくまでタオル地の枕カバーを恋ひてやまざり
晩秋の大気も皮膚も乾きはてにき右頬は枕に擦れて爬虫のごとし
生誕をたまひし母を呪ふがごとく晩秋のねどこに震へうづくまりをり
不幸たるためには何ら資格は要らず夏はいつ過ぎゆきたるか知りあへぬまま
忘却(レーテー)の河のかはみづを飲む死者のここちすかくまでも不吉な秋のゆふべに目覚め
くわうこんに夢よりさめて寝床にあれば読みさしの『ナジャ』の頁は黄金(きん)にかがよふ
救はるる筈なきわれと云ふはやさしく救はれぬ難さに負けてねぐらへ戻る
嗜眠癖(レタルギア)その硬質のひびきする語に黄のそらを窓ゆ見つつも復(ま)た眠りゆく
生存について考へねばならぬのに仏文和訳(ヴェルシオン)のやうな言葉が脳をへめぐる
体調のすぐれぬ一日(ひとひ)からくも過ぐし血と唾液こびりついたる枕を棄つる